

今週のメニュー

■トピックス

◇ご安全に！第31回VEC合同保安会議が開催

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(34)

木下 清隆

■トピックス

◇ご安全に！第31回VEC合同保安会議が開催

塩ビ工業・環境協会では毎年、VCM・PVC製造工場の無事故・無災害操業を目指すための情報交換を目的とし、会員企業全社、全事業所からの参加を得、合同の保安会議を開催しております。

今年の会議は7月5・6日に大阪市のホテルで開催され、弊会会員会社の7社（塩ビモノマー製造5工場、塩ビ樹脂製造11工場）各工場から製造に携わる26名が参加しました。

塩ビを含む化学産業は、装置産業と呼ばれておりますが、設備や管理手法の改善に積み重ねにより、設備を動かす人間の数は少なくなってきています。塩ビに限ったことではありませんが、化学工場は、一度事故を起こしてしまうと大惨事になりかねず、従業員の生命が危険に晒されるばかりでなく周辺の住民の方たちにも多くのご迷惑をおかけしてしまうことになりかねません。安全にプラントの操業を続けてゆくということを、会社として、従業員のために、また、地域のために、最優先課題として取り組んでいます。

そのような状況下で、いわゆる「現場」の皆さんを悩ませているのは、世代交代・技術伝承・現場力の向上などの問題です。ベテランの方は、それこそプラントの新設・増設から立ち会ってこられており、想定外あるいは異常時の経験も豊富にあることでしょう。それらを基に、プラントやシステムは工夫を施され、また自動化され、より安全なものへと改良されています。新しい世代は、改良されたプラントの操業を任されることとなりますが、トラブルが減って異常時の経験が少なくなる中で一人でカバーする範囲は広がってきています。経験や現場力をどのように伝承していくかは化学産業共通の課題となっています。

会議第1日目には、参加者全員が各現場からヒヤリハット事例を持ち寄り、その対策の報告まで行い、それについての議論をVCM班、PVC 1・2班に分かれて行いました。VCM、PVCとも類似の技術で製造している事が多いため、会社が違っても安全の向上に役立っています。過去30回の合同保安会議の事例集も冊子、CD-ROMで参加者に配布されていますので、会議に参加されていない皆様にも役立てていただけます。会議2日目には、保安と技術伝承にテーマを分け、参加者が個別問題を提案する形でグループ別討議を行いました。保安では、緊急時・異常時への対応の問題などが討議され、技術伝承で

は、世代間の技術伝承の問題や、IT化が進むことによる装置の複雑化の問題などが活発に討議されました。今回は、発表ではなく討議する時間を長くとりました。参加者の皆さんには、この形式の方が、自由に発言できることや、討議に集中できるということから好評でした。

最後には、参加者全員で、無事故・無災害操業の継続、安全レベル・現場力の向上に努めることを確認し閉会となりました。「ご安全に！」



開会式での主査挨拶の様子



分科会の様子

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(34)

木下 清隆

<前回とのつながり>

筑紫豊氏の女神説を前回紹介したが、その概要は、博多の櫛田神社は、神埼（佐賀）の櫛田神社からその祭神を勧請したものであり、神埼の櫛田神社の祭神、即ち、豊鍬入姫命が博多の櫛田神社の祭神となった、とするのが氏の論理である。然し、この論理は少なくとも次の三点で問題がある。

その第一点は、祭神そのものである。縁起書の中には豊次比売命はあるが、豊鍬入姫命の名は無い。これについて氏は、「次」の字を「すき」と読むことを知らずに「とよつぐ」と振り仮名をしたと指摘しており、これについては指摘の通りである。例として、島根県の地名に「木次きすき」があり、そこを通る「木次線」があるので、そのことが分かる。



豊鍬入姫宮

このような考察から豊次比売命は豊鍬入姫命であるとするのはいいが、では、なぜ豊鍬入姫命でなければならないのか、という問題が次に出てくる。豊鍬入姫命は第十代崇神天皇の皇女で、天照大神が皇室から外に出されたとき、この皇女に託けて倭の笠縫かさぬいむら邑で祭らせたことになっている。このような書紀の記述から初代の斎王とされているが、伊勢神宮の創建にも櫛田神社

の創建にもこの命が係わったとする史料は無い。本考で述べてきたように、伊勢の櫛田神社の祭神として倭姫命ならまだ理解できるが、豊鍬入姫命ではあまりにも唐突過ぎるし、必然性がない。伊勢内宮の別宮として倭姫宮があるが、これが創建されたのは大正時代に

入ってからのことである。また、豊鍬入姫命については、昭和六十一年になって大神神社の摂社、桧原神社の一隅に祀られるようになったに過ぎない。しかも、この縁起書の中に『倭姫命世記』の一部が引用されているが、倭姫命の名が出てこないのは不自然である。更に、この中の「おふむすめ」であるが、これは次に紹介する文書の中で「伊勢大神宮之大ひめとよつぐひめみこと娘 豊次比売命」と明記し、このように読み仮名むすめが振られていることから、この中の「大娘」を“おおいらつめ”と読むなら、これは貴人の女むすめのことになる。従って、縁起書の内容は「…天照大神の女である豊鍬入姫命…」と読めることになるが、これは全く記・紀の内容に反する。このような間違いがなぜ起きたのかは分からないが、このような点からも、この縁起書そのものの信憑性が疑われてくる。更に、筑紫氏がこの縁起書の制作年代等について何も触れていないことは不思議である。実は、氏が引用した縁起書とその内容がほぼ同一の文書が別に存在する。『本告政景榎田社由緒書上案』（佐賀県資料集成 古文書編第五巻）がそれである。この文書が作成されたのは元和九年（一六二三）となっているので、筑紫氏が引用している縁起書もこの時代若しくは、これ以降に作成された可能性がある。と言うのは、縁起書の中には倭姫命世記からの引用があるが、本告政景の文書にはこれが無いからである。『倭姫命世記』は作成されて以降、世に出ることはほとんど無く、これがある程度、人の目に触れるようになるのは、寛文元年（一六六一）以降であることは先に述べた。従って、本告政景の文書に世記の内容が引かれていないのは当然のことになる。これから見れば、『榎田大明神縁起』が作成されたのは、一六六一年以降ということになる。

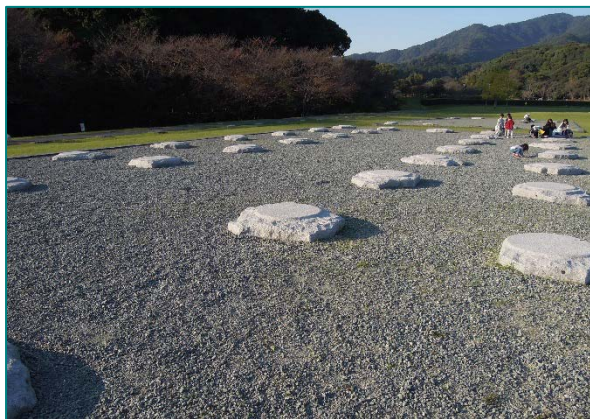
この縁起書が江戸時代初期に作成されたものとするれば、対象となっている時代は約千年も昔のことになり、その内容が混乱していてもおかしくないことになる。要するに、筑紫豊氏が引用している肥前神埼の『榎田大明神縁起』は、江戸時代に書かれたと見られる比較的新しい資料であり、更にこの部分に関する内容も不正確なもので、信憑性の疑われるものである。これをもって、祭神豊鍬入姫説を説くのは無理がある。

第二の問題点は、神埼の榎田神社から博多の榎田神社へ祭神豊鍬入姫が勧請された時期である。氏は「筑前の榎田神社は肥前の榎田神社を、平清盛または清盛に仕えた大宰少貳原田種直が、博多の鎮守として勧請したものであろうとするのが私の説である。」と述べているところから、その時期は清盛時代であることがわかる。何故、清盛なのかは、当時、清盛が肥前神埼荘と大宰府とを同時に管掌し、博多に袖の湊を構築したとされている程に、この地域に大きな勢力を有していたからである。では、この清盛の時代に、即ち、平安末期に神埼から博多に祭神が本当に勧請されたと考えることが出来るのであろうか。これについては、素戔嗚尊が榎田神社に勧請された時期を考え合わせる必要がある。この尊は、社伝に由れば九四一年に山城国の祇園社より勧請されたことになっている。素戔嗚尊については後述するが、清盛時代で考えてもこの尊に対する皇室の尊崇の念は篤く、このような素戔嗚尊が祀られている所へ、豊鍬入姫を祭神として勧請する必要など全く存在しない。ましてやこの祭神を主祭神にすることなど、常識的には考えられないことである。祭神としての格が違うからである。筑紫豊氏は素戔嗚尊の存在を無視して論議を進めており、この点に関しては大きな落ち度である。ただ、氏の主張は清盛時代に始めて榎田神社が博多の鎮守として創建された、とするものである以上、初めから素戔嗚尊は無視されていることになるが、そうであれば、また別の問題が起きてくる。

それは清盛の時代、即ち、十二世紀後半頃まで、博多にはその地の守護神を祀る鎮守の社が無かったのかという問題である。歴史的に見ても既に奴国時代から大陸との間に往来があり、天智天皇時代の白村江の戦においては、数百の軍船が博多の湊から出航したはずである。当時、大宰府は未だ海の近くに置かれていた。その博多の地に、鎮守の社が無かったとは、到底考えられない。白村江の戦い以降、大宰府が博多から現在の太宰府付近へ引っ込むと、鴻臚館時代を迎えることになる。新羅、中国、渤海等からの多くの船が我が国を訪れ、我が国からも多くの船が出かけていった。



大宰府遺跡 1



大宰府遺跡 2

そのような船の出入りをじっと見守り、博多の地を護っていた神社が、この地には古くからあったはずである。清盛時代の博多地方には既に、香椎宮、筥崎宮、更には住吉神社が立ち並んでいた。香椎宮は、神亀元年(七二四)に創建されたとされ、筥崎宮は他の地から延喜二一年(九二一)に勧請されたとされている。住吉神社の創建は定かではないが、このような状況の中で十二世紀も後半になって、豊鍬入姫命を祭神とする鎮守の社が博多に創建されたとは、やはり考えられないことである。

第三の問題点は、京都冷泉院のことである。氏の所説の中に『池の中島の岩神』が出てくるが、これは先に説明したように梅宮神社の祭神であり、酒解神と大若子命と想定されている。従って、筑紫氏が考えているような女神などでは無いのである。なぜこのような誤解が生まれたのだろうか。恐らく、梅宮神社の祭神のことなど全く知らなかった『櫛田大明神縁起』の編者が、何かの史料の中から櫛田神社が注記されている文献を見つけ、これを縁起書に取り入れたのが発端であろう。京都二条猪隈の冷泉院…… 以下の文章には矛盾が無く、先に橘美千代のところで述べたように当時の時代背景がよく読み取れることから、かなり確かな史料と見られる。それを筑紫氏がそのまま利用し、神埼の櫛田神社の祭神が女性であることから、「岩神」を女神と解釈して、神埼由来説が生まれてきたものと想定される。

このように考察してみると、
— 博多の櫛田神社の祭神として、筑紫氏が推している豊鍬入姫命説は何故、豊鍬入姫命なのかの説明がなされておらず、更に、その勧請の時期、そのルートからも豊鍬入姫命とすることには無理がある。また、橋詰氏の説も時代背景を考えれば致し方ない点もあるが論究が不十分であり、これらから見れば、両者が主張している祭神女神説には十分な根拠があるとは云えない。従って、櫛田神社の祭神女神説は成り立たない。—
と結論されることになる。

櫛田神社の女神論はかなり根強いもので、何故このような論議が繰り返されるのか、不

思議なくらいである。実はその真の原因は、博多の櫛田神社が神崎の櫛田神社に深く関わっているからであり、後で改めて、この女神論問題については再検討することにする。
(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いです。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp
